

その後の

# 「鳥久騒動記」

衝撃の結末を迎えた。十一月二十二日未明、老舗料亭として知られた「鳥久」（中村区名駅南）の建物は燃えさかる炎と黒煙をあげて、かつての姿を失った。河村市長が申請の許可を出さず、対立を深め、悩み苦しんだ所有者側が内部を手作業で取り壊し始めた矢先の焼失だった――

今年九月上旬、鳥久の建物を所有する竹中均氏と庁舎内で面談した河村たかし名古屋市長は、最後に握手を申し出た。この日の話し合いで店舗建物の今後に一定のめどが付き、納屋橋周辺の再開発に大きな一歩を踏み出せたと考えたためだ。

しかし、所有者の竹中氏は、儀礼的に手を握りながら、全く逆の思いを抱いていた。建物北側の細長い市有地の引き渡し交渉を皮切りに、五月から一カ月に渡って開かれた河村市長との話し合い。さらに、その後も一向に動きがない市側に抗議するため、重鎮市議を同席して臨んだ今回の面談。竹中氏は取り壊しに向けた率直な意見交換ができるかと考えていたが、市

側からはマンション建設の解約料の話、一〇カ所を越える代替地の提案、路線価を示しながら進む土地の価格交渉ばかりで、思い掛けない展開となっていた。

生活のため、竹中氏に建物の解体計画を止める考えはほとんど無かった。そもそも生活が苦しくなれば、老舗料亭「鳥久」の経営を続けていたかった。面談の中でも、河村市長に交渉をあきらめさせようと取り壊しの意志を述べ、市が持ちかけてくる条件でも価格の設定などで対策を試みた。だが、周りを囲まれた状態で「市民のため」「税金でやることだから」とプレッシャーをかけられ、再開発の重要性や住民感情について延々と論ざれたという。

当初の思惑からはずれ、話を前進させるどころか、解体計画そのものを後退させる事態に、竹中氏は戸惑いを隠しきれなかった。長く苦しい時間が過ぎ、最終的に「私はそれで良いが、家族の説得をしなければいけない」と切り返して面談を終える。帰り際の河村市長との握手を振り返り「あの状況で、家族だけが私の防波堤だった」と胸の内を語った。

九月中旬、竹中氏は「家族の説得に失敗した」と市長側へ伝えて交渉決裂を宣言。市有地の引き渡しを断念して設計を変更し、建物の解体のための道路占有許可の申請を行った。市長が取り壊しを阻止するために許可を出さず、両者の対立を深めていったと言われる「あの」申請である。

## 認識のズレ

後に、河村市長は九月の面談の経緯と握手を根拠に、「いったんは合意した」とメディアに語っている。会見では憲法をそらんじて「私有財産は正当な補償のもと、公共のために用いることができ

る」と語った。

ただ、取材から浮かび上がった交渉の実態は前述した通りだ。市側が提示した補償の正当性以前に契約書は交わされておらず、鳥久側の出した条件さえ達成されていない。「一度流れてしまった話を持ち出して、何を言っているのかわからない」と竹中氏が困惑するのも当然だろう。経緯を聞いた市政関係者からも「甘すぎる。市長は交渉の本質をわかっていない。自治体のトップが何をやってるんだ」「零細企業をやつて来た」と声高に語るが、こんなのは経営者の考え方ではない」と次々に厳しい言葉が飛んだ。中には「相手側の視点で物事を見ることができない」と言う河村市政の問題をよく象徴している」との意見まで出てきた。

取材の中で、それを裏付けるような話がある。

市長周辺の話を総合すると、どうやら河村市長が申請を保留していたのは高圧的な態度で反対運動を試みたのではなく、竹中氏が家族を説得する時間稼ぎをできるよ